

すべてを忘れさせてくれる
無音の美しい世界
自由と自然の調和を求めて

Photograph & Text by
Tony Wu

トニー・ウー 水中写真家、39歳。
シンガポール在住。写真集「Silent
Symphony」(英語版)で仏アンチーブ
国際水中映像祭出版部門賞を受賞。
silent-symphony.comで購入可。
公式ブログ www.tonywublog.com



カリブ海グランドバハマ島のウエストエンドから56キロ北に位置するホワイトサンドリッジ (White Sand Ridge) にて。水深が3~10mと浅くイルカに出会う確率が高いポイント

初めてタンクを背負って海に潜ったのは24歳の時のこと。マニラから430キロ離れた北パラワンにあるエルニドの小さなリゾートで、生まれて初めて体験ダイビングに挑戦した。

息苦しくてすぐに顔を海面に出す初心者も多いらしいが、僕にはまったく違和感がなかった。インストラクターが安全をチェックするために、何度も僕の前に回り込むのが邪魔でしかたなかった。

海の中は「フリー」だった。まるで宇宙にいるかのように。陸で感じる重力から解放され、魚たちと同じ

ように、上下左右どんな方向にも身体が動かせる。銀鱗を輝かせながら迫りくる何百匹ものギンガメアジの群舞に圧倒され、時がたつのを忘れた。

当時、大手外資系金融会社で投資銀行員として働いていた僕は、忙しい合間を縫ってライセンスを取得し、世界中の海に出かけるようになった。トンガではザトウクジラと一緒に泳いだ。バブアニューギニアでは親子連れのジュゴンに遭遇した。小笠原では若いマッコウクジラにフィンを噛まれたこともある。そんな経験を言葉にして伝えるのは難しい。だから僕は水中写真

を始めた。そして6年前、仕事に空しさを感じ、13年に及ぶ金融マンとしてのキャリアを捨てた。

潜れば潜るほど、人間は海のことをまだまだ知らないのだと思う。海の生き物についてはなおさらだ。上の写真には、明らかに「一緒に遊ぼう」というイルカたちと妻・恵美子との間に意思疎通があった。彼らは、お腹を見せながら彼女に近づいてきたのだ。シャッターを切りながら、二つの世界が作り出す美と調和に感動したのをよく覚えている。この写真を通して、見る人にマリライフの何かが伝われば嬉しい。